

古代檜隈の渡来文化（下）

長谷川 透

第4章 檜隈と東漢氏

第1節 東漢氏の動向

檜隈を本拠とする東漢氏の動向と周辺の遺跡については加藤謙吉と飛鳥資料館がすでにまとめている（加藤2002・2006、飛鳥資料館1983）。それらを参考に東漢氏の歩みをみていきたい。

東漢氏は応神20年に東漢氏の祖、阿智使主その子都加使主が十七縣の黨を率いてくることから始まる。雄略朝には東漢氏は大伴氏の下に仕えたようで、東漢直掬は大伴室屋に命ぜられ、手末才伎（新来漢人）を飛鳥に招致している。その後、東漢氏の同輩とみられる檜隈使主博徳や身狭村主青らは呉国に遣いを出され、呉が奉る技術者たちを率いて檜隈野に住まわせた。その場所は呉原（栗原）と名付けられた。欽明朝になると大伴金村が失脚したことで大伴氏が後退するに至り、蘇我稲目が台頭してくる。欽明朝では東漢氏の顕著な動きは見られない。稲目は、司馬達止や王辰爾らを重用し、仏教受容や日本各地への屯倉設置に多くの渡来人を起用していたことが窺える。稲目没後、その子馬子の時代になると東漢氏の動向が活発となる。『元興寺塔露盤銘』には、崇峻朝に始まった飛鳥寺造営に際し、山東漢大費直が造営の指揮し、配下には忍海氏などの渡来系氏族をあてている。このほか、馬子の命により崇峻天皇を暗殺した東漢直駒は、馬子の娘河上娘を隠して妻としたことで誅殺されている。推古16年には倭漢直福因が遣隋使の学生として留学し、学問僧には高向玄理、日文など今来漢人の子孫とともに海を渡った。推古28年には倭漢坂上直が檜隈陵に大柱をたて、大柱直と呼ばれている。この記事の直前には檜隈陵に砂礫が葺かれたことが記されていることから、檜隈に立地する大王墓の改修に渡来系氏族が関わっていたことを窺わせる。

馬子亡き後、蘇我本宗家はその子蝦夷が跡を継ぎ、大臣として政治の中樞を担った。蝦夷は推古天皇に続く皇位に、山背大兄皇子を退け田村皇子（後の舒明天皇）を担ぎ上げた。舒明朝では東漢氏の顕著な動きがみえないが、同族の（倭漢）書直縣が活躍する。彼は百濟宮の大匠として、また皇極朝には舒明崩御に伴う百濟からの弔使の対応役を務めている。大化の改新前夜には、東漢氏一族の長直や漢直らは蝦夷・入鹿の邸宅である甘檜丘の上の宮門、谷の宮門の門番として侍り、大丹穂山に榊削寺を造るなど、蘇我氏の下で軍事部門や宮殿や寺院造営に携わっていた。乙巳の変では入鹿が倒されたことで、父蝦夷を援けるために漢直等が武器を取り戦の構えをなすものの、中大兄側の使者巨勢徳陀臣の説得に応じ武器を捨てた。大化以後、東漢氏は土木、造仏、造船で名を馳せる。漢山口直大口による千仏の製作、倭漢直縣らによる安芸国での造船など多方面の活躍の一方で、倭漢直荒田井比羅夫による難波宮での溝掘削の失敗や倭漢文直麻呂ら古人大兄皇子の謀反に加担、東漢直阿利麻の窃盗などその内容は失策も多くみられる。

天智朝になると東漢氏は登場しない。都が飛鳥から近江に移ったことによるとみられる。その一方、韓半島での情勢が緊迫したことで百濟から多くの亡命人が来た。彼らは政治の要職につき、冠位を得るものや西日本での山城築城の際には現地赶赴していた。天智死後、壬申の乱においては、漢直や東漢氏の流れをくむ各氏族は近江側と大海人側の両陣営に加担している。乱後の天武

6 (677) 年には、東漢氏は7つの罪を叱責されるが、天皇は氏族断絶を望まないとしてその罪を赦免した。その後、東漢氏として登場することが少なくなるが、東漢氏とその枝族らは連姓、忌寸姓を賜り、一族が律令国家体制の一躍を担っていく。なかでも壬申の乱に功績のあった坂上忌寸老、蚊屋忌寸木間、文忌寸禰麻呂などは厚遇され、代々の繁栄の基礎を固めた一枝族もあった。持統朝には漢人が踏歌を奏でるなど東漢氏の流れをくむものたちが技芸を披露している。こうした技芸は渡来した故地に起源をもつと考えられているが、奈良時代には東漢氏の一枝族である檜前忌寸らは東大寺において楯節舞を演じており、儀礼の場において氏族の伝統的な演舞がなされ、こうした技芸も一族に継承されていたと考えられる(藤原1994)。この檜前忌寸らが高市郡司に任命される所以について、同族である坂上苜田麻呂は先祖阿智使主に続く自らの出自を述べその正当性を訴えた。檜隈には東漢氏の流れをくむ枝族が多数居住し、他姓のものは十にして一二であると天皇に言上した。その後、苜田麻呂は東漢氏から分かれた同族たちの窮状を訴え、坂上、内蔵、平田、大蔵、文、調、文部、谷、民、佐太、山口等に宿祢姓が与えられることとなった。奈良時代には東漢氏として史料には登場しないが、遷都に伴い平城・平安京に居を移す有力枝族と檜隈を含む高市郡や今来郡一帯を地盤に活躍する枝族に分かれ、律令国家体制の一役を担っていく。

東漢氏は政治の中枢で暗躍しながらも、金属加工や土木関係、軍事、通訳など多種多様な性格を持ち合わせていた。それは東漢氏の氏族構成が擬制的なもので、多様な業種の渡来人や渡来系氏族を取り込んだことに起因している(加藤2002b)。東漢本宗家や東漢氏の首長の一族があるとするれば、渡来してから長い月日が彼ら自身が持ち合わせた渡来系要素は薄くなっていったとみられ、新来の渡来人や渡来系氏族を擬制的に取り込み配下にすることで、大陸からいち早く渡来文化を摂取していたものと考えられる。

第2節 檜隈地域の遺跡の動向

檜隈中心部はいまも地名が残る檜前大字周辺であろう。地名とあわせて檜隈寺跡地にある阿智使主を祀る於美阿志神社など東漢氏を伺わせるものが残っているからである。檜隈中心部を従来から指摘されている狭義の檜隈と考えられる現在の御園・檜前・栗原・阿部山大字一帯から西は紀路までの範囲とする。その周囲にあたる広義の檜隈を檜隈周辺部と呼び、遺跡の発掘成果に基づいてその動向を探ってみたい。

これまでに檜隈寺所用瓦の年代から寺院の画期と東漢氏の動向と一致する状況が明らかにされている。檜隈寺とその周辺部の変遷は、岩本正二が軒丸瓦の年代から5段階、石田由紀子が丘陵斜面の整地層の年代観から6期に分け(岩本1981、石田2011)、瓦の年代と伽藍整備の画期が関連し、東漢氏の動向と合致する状況が見受けられると指摘した。以下石田の提示した画期に基づいて述べていくこととする。

I期(7世紀前半)前の古墳時代からみていきたい。檜前大田遺跡出土の韓式系土器は檜隈中心部での渡来系土器の最古資料となる。檜隈にきた最初の渡来人の土器である可能性もあるが(高橋2013)、現在確認されている点数は限られているため、今後の資料増加を待って検討したい。5世紀後半以降は、高取町の清水谷遺跡では大壁建物やオンドル遺構、明日香村最南部にある阿部山遺跡群では韓式系土器が確認され、高取町を中心に渡来人に関わる集落が営まれていたようだ。その周囲には稲村山古墳や坂ノ山4号墳など紀路沿いに古墳が築かれる。6世紀後半以降も檜隈中心部では渡来系要素の痕跡はほとんどみることはいえない。

7世紀代になると状況は一変する。I期（7世紀前半）になると檜隈寺講堂に隣接してL字形カマド、檜前大田遺跡では7世紀前半から中頃とみられる大壁遺構が確認される。檜隈周辺部のホラント遺跡では飛鳥Ⅲ～Ⅳ期の大壁建物がみつまっている。しかし、これらの渡来系遺構も単

年 代	文献史料	関連遺跡
応神20年	東（倭）漢氏の祖、阿智使主その子都加使主が十七縣の黨を率いて来る	檜前大田遺跡 榊山古墳 南山古墳群
雄略7年	東漢直掬が百済の手末才伎らを上桃原、下桃原、真神原に遷居 呉国に身狭村主青、檜隈民使博徳を遣わす	新沢千塚126号墳 坂ノ山4号墳 清水谷遺跡
雄略14年	呉の手末才伎らを檜隈野に住まわせ、呉原と名付ける	稲村山古墳 藤井イノヲク12号墳 阿部山遺跡群
宣化元（536）年	檜隈廬入野宮	市尾墓山古墳 与楽ナシタニ1号墳 鳥屋ミサンザイ古墳 市尾宮塚古墳、真弓鐘子塚古墳
欽明7（546）年	檜隈邑の川原民直宮が良駒で大内谷を越える	与楽鐘子塚古墳 阿部山カイワラ1・2号墳 上5号墳 梅山古墳・五条野丸山古墳
崇峻元（588）年	蘇我馬子、真神原に飛鳥寺を作る 東漢直駒、崇峻天皇を暗殺	飛鳥寺
推古16（608）年	遣隋使とともに学生、学問僧に新来漢人ら名を連ねる	
推古28（620）年	檜隈陵の上に砂礫を葺く 東漢坂上直の大柱を立てる	欽明陵の改修 与楽白壁塚古墳
舒明11（639）年	書直縣、百済大宮の大匠となる	真弓テラノマエ古墳
皇極4（645）年	漢直等、軍營を置く（乙巳の変）	檜隈寺前身寺院、ホラント遺跡（大壁）
白雉元（650）年	東漢直縣ら安芸国で百済船二艘を造る	檜前大田遺跡(大壁遺構)
天武元（672）年	兩陣營に加わる（壬申の乱）	

天武6 (677) 年	東漢氏へ七つの不可を叱責	檜隈寺金堂・西門の造営 寺周辺の掘立柱建物・塀 檜隈寺寺院工房 檜前大田遺跡(掘立柱建物群)
朱鳥元 (686) 年	輕寺・大窪寺と共に30年を限り 封戸が与えられる	天武天皇陵 (後に持統合葬) 檜隈寺講堂・塔の造営 (7世紀末) 檜前上山遺跡 マルコ山古墳 キトラ古墳・石のカラト古墳 中尾山古墳・高松塚古墳
宝亀3 (772) 年	坂上苺田麻呂の上奏	檜隈寺で補修 (8世紀後半)
永観年間 (983年頃)	子島寺 (観覚寺) の創建 [子島山 観覚寺縁起]	檜隈寺瓦窯 (10世紀) 寺の南に幡竿支柱(10世紀前半～中 頃) 講堂補修 (11～12世紀) 十三重石塔建立 (11～12世紀) 金堂廃絶 (12世紀) 土坑・小穴 (12世紀後半) 講堂廃絶 (14～15世紀) 講堂基壇上に仏堂 (15世紀)
永生14 (1517) 年	高市郡檜前郷に道興寺あり[清水 寺縁起]	
明和9 (1772) 年	十三重石塔のみある[菅笠日記]	
明治40(1907) 年	於美阿志神社が現在地に移転	

表1 東漢氏の動向と周辺の遺跡

発に営まれたもので、短期間に廃絶したとみられる。L字形カマドは埋め立てられ(奈文研2010)、大壁遺構は掘立柱建物に建て替えられる(明日香村2013)。Ⅱ・Ⅲ期は檜隈寺主要伽藍の造営に関わる整地であり、Ⅱ(7世紀後半)・Ⅲ期(7世紀末～8世紀前半)の渡来系遺構は檜隈寺講堂瓦積基壇のみ認められる。古墳においては7世紀末から8世紀初頭にはキトラ古墳・高松塚古墳にみられる渡来文化が凝縮された壁画を見ることができる。しかし、Ⅲ期以降檜隈地域では渡来系の要素を示す遺構は認められなくなる。東漢氏の名が見えなくなることに合わせてその渡来系文物もみえなくなる。

Ⅳ期(8世紀後半～9世紀初頭)は主要堂塔の基壇や瓦の改修が行われ、伽藍の再整備の時期となる。この時期は坂上苺田麻呂の上表の頃と一致し、伽藍の再整備の可能性が高い(岩本1981)。寺院周辺部では、伽藍主軸に沿った配置をなす掘立柱建物や掘立柱塀が数棟確認されているが、出土遺物が少なく詳細な時期は不明である。寺院北方では奈良三彩や冶金に伴う焼土や

壁土などが出土し、寺院周辺部でも再整備の動きがみられる（奈文研2011）。檜隈周辺部では観覚寺遺跡で平安時代初頭の墨書土器が一括で出土し、共伴して土馬や竈型土製品もみられること（高取町2014）から何らかの祭祀行為が行われていたと考えられる。

9世紀後半以降は伽藍内の活動は希薄であるが、寺院周辺部では補修瓦を造る檜隈寺瓦窯（奈文研2015）や幡竿支柱の柱穴（奈文研2012）などがみられ、引き続き土地利用が行われている。V期（10世紀後半～11世紀前半）になると、堂塔の瓦が少なくなり、堂宇は衰退していったとみられる。寺院周辺部も遺構が希薄となる。一方、檜隈周辺部での大きな出来事として永観年間に子島寺（観覚寺）が創建される。『子島山観覚寺縁起』によると、子島寺は「西北者疆平田真弓檜前阿部山村。東南者至高取壺阪吉備木辻村」と記され、現在の大字観覚寺にある子島寺から明日香村大字檜前、平田、阿部山に及ぶかなり広大な寺域を有していたとみられる。子島寺は高

年 代	文献史料	発掘成果
朱鳥元（686）年	軽寺・大窪寺と共に30年を限り封戸が与えられる	前身寺院の存在 7世紀前半の瓦出土 竪穴建物S B910L字形カマドの廃絶 檜前大田遺跡(大壁遺構)の展開 金堂・西門の造営（7世紀後半） 寺周辺の掘立柱建物・堀（7世紀後半） 講堂・塔の造営（7世紀末） 檜隈寺北方の金属生産（7世紀後半～） 檜前大田遺跡(掘立柱建物群)の展開（7世紀後半～）
宝亀3（772）年	坂上茹田麻呂の上奏	平城宮同範瓦で補修（8世紀後半） 土坑S K09の掘削（9世紀後半） 寺の北に檜隈寺瓦窯（10世紀） 寺の南に幡竿支柱（10世紀前半～中頃） 講堂補修（11～12世紀） 十三重石塔建立（11～12世紀） 金堂廃絶（12世紀） 土坑・小穴（12世紀後半） 講堂廃絶（14～15世紀） 講堂基壇上に仏堂（15世紀）
延長5（927）年	於美阿志神社 [延喜式神名帳]	
永生14（1517）年	高市郡檜前郷に道興寺あり[清水寺縁起]	
明和9（1772）年	十三重石塔のみある[菅笠日記]	
明治40（1907）年	於美阿志神社が移転	

表2 檜隈寺略年表（明日香村2013を一部改変）

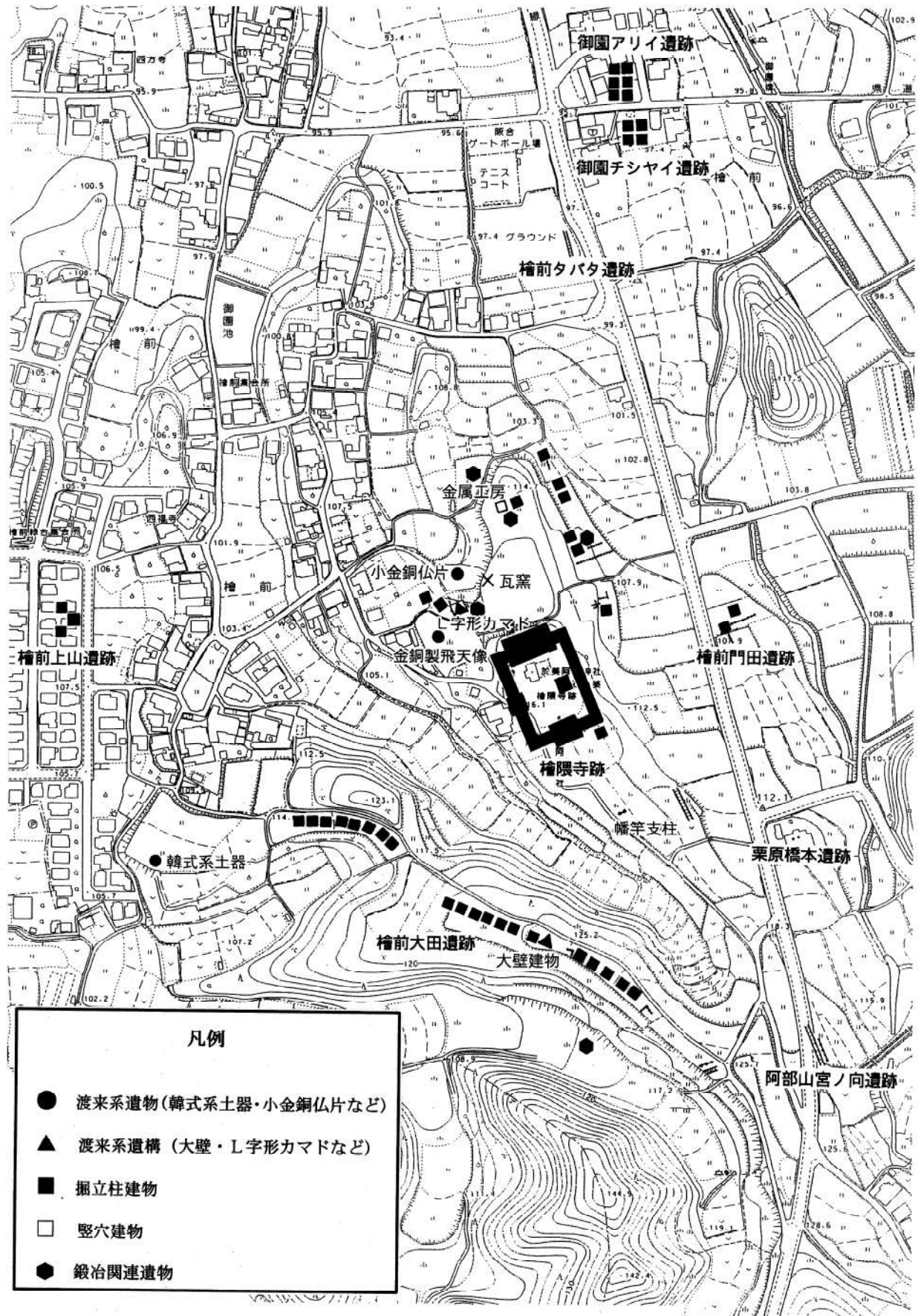


図1 榎限中心部の遺構配置図

取山麓にある子島山寺（現観音院）から現観音寺に子院を設けたことに始まり、その後に隆盛を誇ったとされる。京都清水寺は坂上田村麻呂と子島寺の僧とされる延鎮により創建されるが、両者ともに檜隈、東漢氏の関連が強い。『清水寺縁起』には坂上氏知行の寺社として道興寺（檜隈寺）、竹林寺（呉原寺）の名を挙げており、後世の史料とはいうものの坂上氏による檜隈地域への強い影響力を窺い知ることができる。檜隈寺は子島寺（観音寺）の寺域に包括されることにより伽藍堂塔の衰退が加速していった可能性も考えられる。

VI期（11世紀半ば～12世紀前半）には檜隈寺塔跡心礎に十三重石塔が建立され、講堂の基壇が玉石積みに造り替えられる。この十三重石塔出土のガラス小壺は、近年自然科学分析によって材質がカリウム鉛ガラスとされ、平安時代中～後期に製作された可能性が示された（石橋ほか2015）。石塔建立に伴って埋納されるが、石塔建立や基壇改修がなされ檜隈寺の寺勢も変化していったと考えられる。檜隈周辺部では集落の状況はよくわからない。しかし、阿部山遺跡群シモクラ地区・カイワラ地区で輸入青白磁を埋葬した木棺墓や火葬墓が確認され（明日香村2010・2011）、遠距離との交易を通じて輸入陶磁器を入手できる立場にある集団がいたことが窺える。

第5章 まとめ

以上、近年の檜隈地域の考古学成果を東漢氏の動向と絡めて論じてみた。拙稿（上）の刊行後、昨年8月には高取町の森ヲチヲサ遺跡で5世紀後半代のオンドル遺構を備えた大壁建物が確認された。古墳時代の大壁建物の中では最大級の床面積を誇るものとして報道された。性格としては渡来系集落の集会所のあらうと推測されている。このように古墳時代には渡来系要素を示す遺構・遺物が高取町で集中的に確認され、分布の中心をなしている。東漢氏や呉原に移り住んだ渡来人とは少し距離を隔てているため東漢氏との直接的な結びつきを考えるには慎重を要する。それは従来から議論されている檜隈の範囲とも関わってくる。加藤謙吉も指摘するように、狭義の檜隈を越えた範囲にも渡来系文物が確認されており、古代の檜隈はもっと広い範囲に及んでいた可能性がある（加藤2006）。しかし、小地域単位で考古遺物の分布を眺めてみると、奈良県の中南和の渡来系文物では、鉄滓や鍛冶関連遺物を副葬する古墳では忍海などの葛城地域の古墳群や藤井イノオク14号墳や与楽罐子塚古墳など一部の古墳に認められるものの、磐余から飛鳥藤原の古墳群では認めることができない。また新沢千塚古墳群など渡来系文物が顕著な古墳でも鉄滓や鍛冶関連遺物、ミニチュア炊飯具などはみられない。こうした違いは古墳を造営した氏族の出自や性格、築造年代の違いが反映されていると考えられる。明日香所在の八釣マキト古墳群では二層ガラスや把手付きコップや金製耳輪、銀張金銅製雲珠などが出土し（明日香村2011）、渡来系の色彩が濃い新沢千塚古墳群のような遺物の組成をなしている。こうした副葬品や供献土器にみられる葬送儀礼の違いを古墳群単位での抽出は可能であり、渡来系集落とあわせて検討することで、渡来人や渡来系氏族の出自や性格を明らかにできると考えられる。文献史料の検討からも東漢氏が多種多様な枝族を抱えた擬制的集団であることから、飛鳥・檜隈地域の渡来系文物の細分は東漢氏の実態を反映している可能性は高い。東漢氏と同じく古い渡来伝承を持つ秦氏についての検討を行った丸川義広によれば、秦氏の伝承地においても渡来系文物は希薄であり、日本に定着する過程でその様相が薄まることを指摘した（丸川2005）。この指摘と同様に東漢氏も檜隈に定着する過程で渡来系要素が薄れみえにくくなっている可能性がある。特に生活し定住化することで集落遺構や日常使用する土器などではみえにくく、伝統的に継承された職掌や葬送儀礼、墓制、土木技術などからその系譜や出自をたどることが可能ではないだろうか。東漢氏が今来才

伎らを同族に取り込むことによって新たな渡来文化を摂取しているとなると、いまみえている渡来系要素が東漢氏なのか新来で取り込んだ渡来人・渡来系氏族なのか、判別は難しいだろう。檜隈及び周辺の渡来系文物の細別化を図ることは擬制的社会集団である東漢氏や枝族の動向を少しでも明らかにし得るものと考ええる。

東漢氏に関する史料

① 『日本書紀』 応神天皇廿年秋九月

倭漢直の祖阿知使主、其の子都加使主、並に己が黨類十七縣を率いて来歸けり。

② 『日本書紀』 雄略天皇七年秋七月

中略。是の歳、中略。是に於て西漢才伎歎因知利側に在り。乃ち進みて奏して曰く、奴より巧なる者、多に韓国に在り。召して使ふべしと。天皇群臣に詔して曰く、然らば則ち宜しく歎因知利を以て弟君等に副へて、道を百済に取り、并に勅書を下したまひて、巧みなる者獻らしめよ。中略。乃ち海部直赤尾と、百済の獻る所の手末才伎を將て大島に在り。天皇、弟君の不在を聞きて、日鷹吉士堅磐、固安錢を遣し共に復命さしめたまふ。遂に即ち倭国吾礪ひ廣津邑に安置らしむ。而して病み死ぬる者衆し。是に由りて、天皇大伴大連室屋に詔して、東漢直掬に命せて、新漢陶部高貴、鞍部堅貴、畫部因斯羅我、錦部定安那錦、譯語卯安那等を以て、上桃原、下桃原、眞神原の三所に遷し居らしむ。

③ 『日本書紀』 雄略天皇八年春二月、

身狭村主青、檜隈民使博徳を遣し、吳国に使ひせしむ。

④ 『日本書紀』 雄略天皇十四年春正月

身狭村主青等、吳國の使と共に、吳の獻れる手末才伎漢織、吳織、及び衣縫兄媛、弟媛等を將て、住吉津に泊る。是の月、吳客の道を為りて、磯齒津路に通し、吳坂と名づく。三月、臣連に命せて吳の使を迎え、即ち吳人を檜隈野に安置らしむ。因りて吳原と名づく。衣縫兄媛を以て大三輪神に奉り、弟媛を以て漢衣縫部と為す。漢織、吳織、衣縫は是れ飛鳥衣縫部、伊勢衣縫が先なり。

⑤ 『日本書紀』 欽明七年秋七月、

倭国の今來郡言す、五年の春に川原の民直宮、樓に登りて聘望る。乃ち良駒を見つ。影を睨て高く鳴き、軽く母の背を超ゆ。就きて買い取り、襲け養ふこと年を兼ね。壯なるに及びて、鴻のごと驚き、龍のごと翳りて、輩に別に、群に越ゆ。服御隨心、馳驟合度。大内丘の壑を超渡ること十八丈なり。川原の民直宮は檜隈の邑の人なり。

⑥ 『日本書紀』 崇峻天皇五年十一月

馬子宿祢、群臣を詐りて曰く、今日、東国の調を進る。乃ち東漢直駒をして天皇を殺したてまつらしむ。〔或本に云く、東漢直駒は東漢直磐井の子なり。〕是の日、天皇を倉梯岡陵に葬めまつる。中略。是の月、東漢直駒、蘇我嬪河上娘を偷み隠して妻と為す。〔河上娘が駒の為めに偷まれたるを知らずして、死去にきと謂へり。駒嬪を奸せる事蹟はれて、大臣の為めに殺されぬ。〕

⑦ 『日本書紀』 推古天皇十六年九月辛巳、

唐客斐世清罷り歸る。則ち復た小野妹子臣を大使と為し、吉子雄成を小使と為し、福利を通事と為して、唐客に副へて遣はす。中略。是の時に唐国に遣せる學生は、倭漢直福因、奈羅譯語恵明、高向漢人玄理、新漢人大國、學問僧新漢人日文、南淵漢人請安、志賀漢人惠隱、新漢人廣齊等、并せて八人なり。後略。

⑧ 『日本書紀』 推古天皇廿八年冬十月、

砂礫を以て檜隈陵の上に葺く。則ち城外に土を積みて山を成す。仍りて氏毎に科せて、大柱を土山の上に建つ。時に倭漢坂上直が樹て柱勝れて太だ高し。故に時の人號けて大柱直と曰う。

⑨ 『日本書紀』 舒明天皇十一年

秋七月、詔して曰く、今年大宮及び大寺を造作らむ。則ち百済川の側を以て宮處と為す。是を以て、西の民は寺を作る。

即ち書直縣を以て大匠と為す。

⑩ 『日本書紀』皇極天皇三年冬十一月、

蘇我大臣蝦夷が児入鹿臣、家を甘櫛岡に雙べ起つ。大臣の家を稱びて上宮門と曰ふ。入鹿が家を谷宮門と曰ふ。中略。大臣、長直を大丹徳山に使はして梓削寺を造らしむ。中略。漢直等全ら二門に侍る。

⑪ 『日本書紀』皇極天皇四年六月丁酉朔甲辰、

中大兄密に倉山田麻呂臣に謂りて曰く、三韓調を進る日、必ず將に卿をして其の表を讀唱しめむ。遂に入鹿を斬らむと欲する謀を陳べたまふ。中略。中大兄即ち法興寺に入りて、城を為りて備ふ。凡そ諸皇子、諸王、諸卿大夫、臣連、伴造国造、悉に皆隨に侍り。人をして鞍作臣が屍を大臣蝦夷に賜ふ。是に漢直等眷屬を摠べ聚め、甲を撰、兵を持ちて、大臣を助けて軍陣を設く。

⑫ 『日本書紀』孝徳天皇白雉元年冬十月

中略。即ち將作大匠荒田井直比羅夫を遣して、官の塚の標を立つ。是の月に、始めて丈六の繡像、俠侍、八部等四十六像を造る。是の歳、漢山口直大口、詔を奉りて千佛の像を刻りたてまつる。倭漢直縣、白髮部連鑑、難波吉士胡床を安芸国に遣して、百濟舶二雙を造らしむ。

⑬ 『日本書紀』天武天皇元年己丑

天皇和暫に往まして、高市皇子に命せて軍衆に號令したまふ。天皇亦野上に還りて居します。是の日、大伴連吹負、密に宮守司坂上熊毛と議りて、一二の漢直等に謂ひて曰く、我れ詐りて高市皇子と稱りて、數十騎を率ゐて、飛鳥寺の北路より出でて營に臨まむ。乃ち汝内応せよ。中略。則ち熊毛及び諸の直等共與に連和し、軍士亦従ふ。

⑭ 『日本書紀』天武天皇六年六月壬辰朔乙巳

大に震動る。是の月、東漢直等に詔して曰く、汝等が黨族は、本より七不可を犯す、是を以て、小墾田の御世より近江の朝に至るまで、常に汝等を謀ることを以て事と為す。今、朕が世に當りて、將に汝等の不可之状を責めむとす、犯の隨に罪すべし。然れども頓に漢直の氏を絶さむことを欲せず。故れ大恩を降して以て原したまふ。今より以後、若し犯す者有らば、必ず不赦の例に入れむ。

⑮ 『日本書紀』天武天皇朱鳥元年

己丑、檜隈寺、輕寺、大窪寺に各百戸を封す。卅年を限りてなり。

⑯ 『続日本紀』光仁天皇宝龜三年

正四位下近衛員外中将兼芸守勲二等坂上大忌寸苅田麻呂等言。以檜前忌寸任大和国高市郡司元由者先祖阿智使主。輕嶋豐明宮馭宇天皇御世、率十七縣人夫歸化。詔賜高市郡檜前村而居焉。凡高市郡内者、檜前忌寸及十七縣人夫滿地而居。他姓者十而一二焉。

⑰ 『清水寺縁起』

氏知行寺々

道興寺

宇口寺云々。右大和国高市郡檜前郷。件所者。先祖阿智王入朝時恩給地也。仍建立寺云々。

竹林寺

吳原寺云々。右大和国高市郡。件寺者。先祖從三位駒子卿奉為敏達天皇所建立也。

【参考・引用文献】

飛鳥資料館1983『渡来人の寺－檜隈寺と坂田寺－』

明日香村教育委員会2001『明日香村遺跡調査概報 平成11年度』

明日香村教育委員会2010『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』

明日香村教育委員会2011『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』

- 明日香村教育委員会2013『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第9集
- 石田由紀子2011「檜隈寺周辺の調査－第164次 4 まとめ」『奈良文化財研究所紀要2011』
- 石橋茂登ほか2015「於美阿志神社石塔婆出土ガラス小壺の調査」『奈良文化財研究所紀要2015』奈良文化財研究所
- 岩本正二1981「明日香村檜隈寺の調査」『佛教藝術』136号 毎日新聞社
- 宇治谷孟1992『続日本紀 全現代語訳(上)』講談社学術文庫
- 加藤謙吉2002a「東漢氏と檜前」『東アジアの古代文化』111
- 加藤謙吉2002b『大和の豪族と渡来人 葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』吉川弘文館
- 加藤謙吉2006「飛鳥と渡来人」『続明日香村史』上巻 考古編
- 加藤謙吉2010「漢氏と秦氏」『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』吉川弘文館
- 黒板勝美1932『訓読 日本書紀 中巻』岩波書店
- 黒板勝美1932『訓読 日本書紀 下巻』岩波書店
- 高取町教育委員会2014『観覚寺遺跡発掘調査報告書V(第9次調査)』高取町文化財調査報告 第40冊
- 高橋幸治2013「檜前大田遺跡の渡来系土器」『明日香小路 飛鳥京』VOL. 38秋冬号 飛鳥京観光協会
- 遠日出典1991『奈良朝山岳寺院の研究』名著出版
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2006『海を越えたはるかな交流－橿原の古墳と渡来人』
- 奈良文化財研究所2010「檜隈寺周辺の調査－第159次」『奈良文化財研究所紀要2010』
- 奈良文化財研究所2011「檜隈寺周辺の調査－第164次」『奈良文化財研究所紀要2011』
- 奈良文化財研究所2012「檜隈寺周辺の調査－第172次」『奈良文化財研究所紀要2012』
- 奈良文化財研究所2015「檜隈寺周辺の調査－第180次」『奈良文化財研究所紀要2015』
- 奈良文化財研究所2015「檜隈寺瓦窯の調査－第181－4次」『奈良文化財研究所紀要2015』
- 奈良文化財研究所2015「檜隈寺周辺の調査－第184次」『奈良文化財研究所紀要2015』
- 藤原茂樹1994「檜前村と芸能－榎節舞と東漢氏－」『萬葉』第153号 萬葉学会
- 丸川義広2005「山城の渡来人－秦氏の場合を中心に－」『ヤマト王権と渡来人 日本考古学協会2003年滋賀大会シンポジウム2』サンライズ出版株式会社